

世界に舞う、里神楽。

竹間沢里神楽保存会

竹間沢の前田家は里神楽の元を務める家系で、村の中で占いや祈禱を司る陰陽師おみよかしでした。その起源は定かではありませんが、江戸時代終わり頃の古文書に「御神楽師 前田筑前」の名

前が見られるので、百数十年前の頃には神楽師として活動していたことが分かります。その伝統を受け継ぐのは、竹間沢里神楽元締、前田益夫さんと竹間沢里神楽保存会の皆さん。毎年実施している資料館まつりで古民家の旧池上家住宅を



1 圧倒的な威圧感と迫力を感じるのは、演者の熟練の腕のおかげだ。2 3 舞台を清めるために行う巫女の舞。この日巫女を務めた池上彩さん。小学5年生から竹間沢里神楽保存会の一員として活動を続けている。

1 ピンクの布をかけ、女装を表現。2 父の演技を袖で見つめる。3 立ち廻りの場面では激しい動きに。4 100年以上前の本物の人の髪がこの面には使われている。5 面の髭などは主に馬の鬃。



6 9月30日に行われた資料館まつりでの夜神楽公演。息の合った舞台を披露できるのは、熟練の技と経験があるからだ。7 8 見る角度によって表情が変わる神楽面。人間の顔のように泣いたり笑ったりすることができないため、演技で表現をする。指先まで意識して舞うという。9 演技に合わせて神楽歌を詠む、竹間沢里神楽元締の前田益夫さん。何も見ずに詠めるのは、神楽が体に沁みついてる証し。

背景にした夜神楽公演などを行うほか、今年は日本を飛び出し、マレーシアで里神楽を披露するなど、伝統を守りながら三芳町の魅力を世界に広めようと尽力しています。

全て手彫りの神楽面 県有形民俗文化財に

竹間沢の前田家に伝わる神楽面は、すべて代々の元締が手彫りし、補修を行いながら現在まで大切に使用されてきました。神楽面をはじめ神楽に使用される用具一式は、「竹間沢の神楽面・面芝居面(付)衣装」として、昭和55年3月に埼玉県有形民俗文化財に指定され、90面以上が大切に守られています。

その中でも益夫さんの祖父、前田民部(本名||信忠・大正15年没)の手によって作られたも

車人形」の首かしらづくりに活かされました。

世界に羽ばたく里神楽

春や秋の祭礼の頃になると、神社から声がかり、所沢市日比田の氷川神社の祭礼(4月9日)、地元の竹間神社の春の祭礼(4月26日)、所澤神明社の祭礼(9月15日)、北野天神社などで神楽を奉納し、県内の里神楽伝承者として、舞台での公演も数多く行っています。

今では海外での公演を果たし、活躍の場を広めるなど、町の貴重な伝統芸能は魅力の一つに。百年以上前から伝わる里

神楽とは

神楽とは、祭礼のときに神霊を迎え、祈禱や誠意を行う神事芸能のこと。その形式は「舞い」を主体とし、舞うことによって神がかり状態になったり、神を顕彰する物語を演じます。竹間沢里神楽に使われる神楽面は全て手彫り。ほとんど神楽では台詞がなく、一つの表情しかない神楽面ですが、体全体を使った仕草で役柄や場面を表現し、様々な表情を表わすことが特徴です。



のが多く、民部は半日で一枚の面を彫り上げる腕前だったと言われています。「太夫のところ(前田家)に行くと言葉が残っていて、村人の顔がそのまま神楽面になったと思われる面が伝わっています。

彫り上げた面の表面には、幾重にも胡粉ごこんを塗り重ねて仕上げます。この技術は前田家に伝わるもう一つの伝統芸能「竹間沢



11月4日にマレーシアのベタリングジャヤ市で行われた国際フェアで竹間沢の里神楽が披露された。

神楽。今もなお、公演を見ることのできるのは、先祖の想いを受け継ぎ、伝統芸能を守りたいと強く願う想いがあるからではないでしょうか。

故郷の伝統を繋いでいきたい

父と姉が里神楽をやっていたことがきっかけで、小学5年生から25年間里神楽に携わってきました。年を重ねるにつれ、伝統芸能の大切さを痛感。伝統芸能を守ることは当たり前とと思っていましたが、里神楽をやっていることを友人に話すと「すごいね!」と驚かれます。三芳の人たちは三芳愛が強いことが特徴。地元

の子どもたちや若い人たちに関心を持ってもらうため、これからもずっと舞い続け、故郷の伝統芸能を、後世に繋いでいきたいと思っています。

竹間沢里神楽保存会
池上彩さん (36)

